

— 茶事の実験を通して接客形態と方法を考察する —

東京家政学院 大家政

○

中

原

幡

子

小

宮

山

優

香

◆目的 前項の文献を主にした分析の結果をふまえて”その2”では茶道のなかでも最も正式な客のもてなし方である”茶事”(懐石料理・濃茶・薄茶までを含む)を実際に行いこれを通してより人間関係を尊重した接客形態を分析し、さらに現代住居の接客方法と空間について考察する。

◆方法 中原自宅の茶室、8帖の広間、水屋、台所、露地等を使って、風炉正午の茶事(表千家)を行った。東(亭主)、半東と客4名、台所方2名、水屋の準備、庭の掃除から始めて、客到着、席入り、風炉釜のあらため、懐石、中立ち、炭点前、濃茶、薄茶の点前、客送り出しまでを。時間を軸に、平面の移動を主として、ビデオ7台とカメラを用い、綿密に記録を取りながら実験した。なお動作と時間の無駄をはぶくために、東と料理方は専門家に依頼した。現代の一般住宅の接客方法の考察については、中原が設計して、家族、生活、住まい方もはつきり解る住宅について考察した。

◆結果 茶道の作法にそった接客形態は、普通の生活では到底考えられない程の時間と細かい気くばりを必要とした。”現代ばなれ”しているのでは、と思う反面、色々言はれながらも400年もの長い間、作法として受け継がれてきたのは、人をもてなす場合これだけの緊張感が、より密度の高い人間関係を生み出し保ち得ること。さらにそれが気持ちよいと感じる人が多い。と言うことを体得した。そして一般住宅に於ける接客形態は実例をOHPで示すが、今後もう少し丁寧な接客方法についても検討したい。